

菱田春草の欧米遊学と J. McN. ホイッスラー

田邊 咲智 (関西大学)

菱田春草(1874-1911)らが展開した朦朧体については、ジャポニズムの影響を受けた、ジェームズ・マクニール・ホイッスラー [James McNeill Whistler] (1834-1903)のトーナリズム [tonalism(色調主義)]との近似性が、明確な根拠を挙げられることなく指摘されてきた。春草と横山大観(1868-1958)の作品は、明治37年(1904)から明治38年(1905)にかけての欧米遊学中に「ホイッスラー氏の晩年の絵の配色に大きく共通する」などと、欧米のメディアに報じられ、すでに欧米においてもその近似性が指摘されていた。朦朧体とトーナリズムの近似性については、細野正信氏、佐藤道信氏、田中日佐夫氏、勅使河原純氏らが、欧米の絵画と共通する流れの中で展開したもの、という見解を示したが、その理由については明解に論じられていない。近年では、佐々木美帆氏が、春草らの欧米遊学の動向を検討し、春草と欧米の絵画との接点を具体的に示した。こうした論を踏まえて、本発表では、欧米遊学中にホイッスラーの作品を見た春草が、トーナリズムを強く意識して朦朧体を展開させた、という視点で遊学直後の約2年間における風景画を捉え直してみたい。

ホイッスラーの作品が本格的に日本に紹介された時期は、明治36年(1903)以降であり、遊学する以前に、春草が朦朧体を試みる過程でホイッスラーの作品から直接的な影響を受けたとは言い難い。一方、春草が欧米遊学後に制作した《海辺朝陽》(1906)や大観と連名で発表した画論「絵画に就いて」(1905)には、ホイッスラーのトーナリズムとその自然美に近似した内容が示され、そこには日本美術院を率いた岡倉天心[覚三](1862-1913)の理想が根底にある。欧米遊学期の春草の風景画は、トーナリズムを彷彿とさせる、限られた色調によって抒情豊かな画面を目指し、遊学直後は、明快な色調と新しい表現としての点描も取り入れた。欧米遊学の動向を再検討すると、春草は、ホイッスラーの作品に出会い、その作風に共感を覚えたことは明らかである。

欧米遊学前における春草の朦朧体は、岡倉の指導が根底にあり、また黒田清輝(1866-1924)らの外光派の影響を半ば受けたもので、直接的に西洋絵画の影響を受けて展開されたものではない。こうした流れを跡づけると、欧米遊学前における春草の思考には、日本美術院の理想、伝統的な東洋絵画、洋画が複雑に絡み合って影響していたことを見逃せない。しかし、朦朧体を深化させようとした春草は、欧米遊学によってホイッスラーのトーナリズムに共感を覚え、新たな制作活動に入ったと考えられる。ただ、春草はトーナリズムの影響を単純に受けたわけではない。春草の朦朧体は、ホイッスラーのトーナリズムと深い関係があることは間違いないが、厳密にはそれとは異なる色彩豊かな絵画である。春草の朦朧体には、ホイッスラーとの同時代的というべき「共時性」を見てとるべきだと結論付けたい。